

神のおとずれ

日本聖公会 神戸教区報



2019年
12月号
クリスマス号

発行所
神戸教区事務所
TEL 078(351)5469
FAX 078(382)1095
<http://www.nskk-kobe.org/>

発行責任者
司祭 小南 晃

印刷所
文明堂印刷所

クリスマスの灯

司祭 バルナバ 瀬山 会治



十一月になると街はクリスマス一色に変わり、その後二か月間、続きます。多くの人

の喜びがあります。この時、ロウソクの灯に目を向け、クリスマスに思いを寄せることは良い過ごし方だと思えます。なぜなら、それは私たちの心の中にあるロウソクの灯に思いを寄せてクリスマスを迎えるということだからです。

「明るい灯」

ロウソクの火を見つめる時、イエス様の言われた「世の光」を思い出します。また、災害で停電を経験された方は、暗闇の中で不安な時間を過ごすなければなりません。周囲が闇に包まれ、周りに何があるのかもわからなければ、自分一人だけが世の中に取り残されたような孤独感に襲われます。そんな時、小さな光でもあれば、どんなに安心できるでしょうか。灯の光があれば、冷静に次の行動について考えることができます。

「暖かい灯」

ロウソクの火に手をかざすと、暖かな温もりを感じます。冬になると誰もが暖かいものが恋しくなりますが、寒さが厳しい日には、暖かい飲み物や食べ物を口にするだけで、体の芯まで温められて幸せな気持ちになれます。体も心も冷え切っていては、元気が出ませんし、良いことを思うこともできません。それは、まるで凍りついた人の心を温かさで溶かしていく神様や人々の優しさを思い出させてくれます。

「分かち合う灯」

ロウソクの火は、他のロウソクに火を灯すことができます。しかも、その火は決して小さくなることはありません。たとえ、何百、何万本と言おうロウソクに火を灯していても、その炎は小さくならず、変わらず輝いています。同様に、私たちの心の中に灯されている炎も、自分だけでなく意気消沈し、心の火が消えてしまっている友に分け与えることができます。

「誰かのための灯」
ロウソクは、火を燃やすために自らの体を用います。それは、イエス様が私たちのためにご自身を十字架の上に捧げられたことに似ています。そしてイエス様に従う私たちも、自分の身体を用いて火を燃やすことが期待されているのです。確かに、それは自分自身を犠牲にすることなのですが、隣人のために自分を通して神様の光を輝かせることなのです。更に、そこには痛みを伴うことがあるかもしれませんが、決して絶望的な苦しみではありません。むしろ、私と言うロウソクに輝く神様の光で、暗闇の中にうずくまっていた誰かを安心させ、歩むべき道を照らし、冷え切った心を温め、共に喜びを分かち合うことができます。

二〇〇〇年前の昔、クリスマスの夜に、私たちのために神様からのプレゼントとして、イエス様はお生まれになりました。そしてイエス様は、世の光、温かい心、平和の灯を教え、私たちに与えてくださいました。私たちは神様からいただいたこの灯を、この世に掲げることが救われており、それこそがクリスマスの喜びなのです。この世のすべての人々が争いを止め、互いに手を取り合うことができるようにお祈りいたします。メリークリスマス！

神戸昇天教会牧師
神戸松蔭女子学院大学
チャプレン